中高生とともに差別と闘う

『人権作文という取り組み』

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

人権作文という取り組み

私の町では、ほぼどこの中学校も、毎年「人権作文を書く」という取り組みを学校を挙げて行っています。書く前には、講演会やビデオ鑑賞、また人権学習の取り組みを行います。書いた後には、学年や全校での発表会を行います。またその機会に、生徒同士の意見交換を行うこともあります。

先日、本校でも人権作文学年発表会が開かれました。コロナ渦の影響もあり開催方法について議論されたのですが、何とか3密を避け、体育館を使って行うことができました。

中学一年生六クラスから代表者が出て作文を読みあげるのですが、今年はいつにも増して、その内容が多彩でした。アメリカで起きた黒人差別の問題やLGBTの問題。また、自身のいじめや不登校の体験。そして、コロナ差別による問題。

「本当に中学一年生?」と思えるような内容で、意識の高さを例年以上に感じました。もしかすると、約三ヶ月に及ぶ臨時休校期間が、そんな思考を生みだしたのかもしれません。

発表後には意見交換を行ったのですが、途切れることなく手は挙がり、発表内容に重ねて自分を語ったり、感想を述べたりしていきました。その姿はまるで、「待ってました!」と言わんばかりで、子どもたちにとって大変有意義だったようでした。後の感想にそんな思いが溢れていました。その一部を紹介します。

生徒感想から

「僕はこの人権学習をする前は、差別や偏見は人ごとだ、なぜそのようなことをしなくてはならない、と強く思っていました。しかし、この人権学習では、前で発表した六人がまったく人ごとではないことが分かりました。僕はあの六人のような人になりたいです。でもなりたいだけじゃ駄目だから、これからもたくさんの人権学習をし、自分でも自主的に人権を学んでいこうと思いました。」

子ども同士の語り合いこそが、互いの生き方を変えていくのだということが伝わってきます。

＊

「僕は発表をしませんでした。理由は、ただ単に恥ずかしかったからです。しかし、これからはたくさん手を挙げようと思いました。理由は、差別や偏見、いじめなどをされている人は、自分が恥ずかしいという気持ち以上の嫌な気持ちがあると思うからです。」

相手への共感により、自らを奮い立たせようとする意思の強さがうかがえます。

＊

「意見交換の時にUさんが、『今のままのあなたでいてほしい』と言ってくれました。その一言だけでも、私の喜びははかりしれませんでした。Uさんは小学校からのつきあいだったので、私のことを見てくれていたと思うと嬉しくなりました。Uさんだけでなく、他にも違う小学校の人からも意見、思い、考えが聞けました。この私の発表を聞いて、心に届いている人が他にもいれば、私はそれだけで誰かを助けた気持ちになれました。」

自分のことを友達はどう見ているのか…。中学校に入学したすぐの頃は、他の小学校から来た同級生を警戒することがよくあります。周囲の視線や力関係を気にするのです。ですからこのタイミングでこのような学習をすることは大変意義深いといえます。

＊

「発表する人ははきはきと読めていて良かったし、聞く人もちゃんと聞けていて、たくさん発表できていたので良かったと思いました。」

この場合、聞く側が大きな鍵を握っています。話す側は、聞く側の真剣なまなざしを感じるからこそ話そうと思えます。対話は、相手へのリスペクトがあってこそ成立します。

＊

「一番僕が心に残ったのは、Yさんの『友達のおかげで』です。自分もYさんと同じような経験をしているので、ものすごく共感できたし深く分かりました。自分と同じような悩みを抱えていた人がいるんだなぁと思いました。本当にこの機会を設けていただいた先生方、作文を書いてくれたみんなにとても感謝しています。」

人はよく「自分だけ」と思いがちです。しかし、よく話してみれば、「自分だけじゃなかった」と思えることはよくあります。語り合ってこそ、つながりが見出せるわけです。

＊

「私もなぜか緊張したけど、とっても楽しい時間だったので、また行いたいです。」

「緊張したけど楽しい」という感覚。そして「また行いたい」と思えるような人権学習を、すべての学校で根づかせたいものです。

＊

「今回の人権作文発表会は、とても有意義なものだったと僕は思う。人権とは何か、いじめとは何か、差別とは何か、人間とは何かを改めて考えさせられる時間となった。」

「人権とは何か」、「差別とは何か」、「人間とは何か」、「仲間とは何か」、「生きるとは何か」、「命とは何か」、「幸せとは何か」…この学習をしていると、いつも行き当たる根源的な命題です。答えはあるようで、よく分かりません。それぞれがそれぞれなりに、深く考えることになります。けど、その「答えのない問い」のようなものに「みんなで向き合っていく」ことが、貴重な経験になるのだと思います。

そんな人権作文には、私自身、いくつかの思い出深い取り組みがあります。少し長い連載になりますが、次号からそのうちの一つをお話ししたいと思います。

イラスト　中島　亜唯